



南国の強烈な日射がジリジリと首と背中を灼く。頬をつたって汗がポタポタ流れ落ちる。私は小さな熊手と刷毛を使い「お迎えに来ました」と、地中に横たわる薄茶色の全身骨を慎重に取り出す。遺骨についた土を丁寧に払いながら、心の中で「お名前は？ 何歳ですか？ お国のためにありがとうございます」と話しかける。私は太平洋の真ん中、日本から三日かかる小さな島、ウォッセにいた。

（左）遺骨の捜索に協力してくれた島民のワーカーたち。日本人にならって彼らも遺骨を丁寧に扱ってくれた。（右）上空から見たウォッセ島の全景

●多くの餓死者を出したマーシャル諸島ウォッセ島で46年ぶりに戦没者の遺骨収容が行なわれ、今回48柱を祖国にお迎えすることができた！

■日本青年遺骨収集団 鈴木 千春

# 「ウォッセ」遺骨収容の旅

二千七百柱が未帰還

今年二月二十日〜三月七日まで、マーシャル諸島ウォッセ島の遺骨収容を行った。この島での収容は、昭和四十八年以来、四十六年ぶりである。戦没者二千九百名（うち約九割が餓死）のうち、昭和四十年代に収容されたのは二百八柱。残る二千七百柱は未帰還で、その中には私の大叔父がいる。

派遣メンバーは、一般社団法人日本戦没者遺骨収集推進協会より三名、遺骨鑑定専門員一名、日本遺族会一名、厚生労働省一名、日本青年遺骨収集団から私、の合計七名だった。

マキン、タラワの日本軍が、昭和十八年十一月に玉砕した後、マーシャル諸島は敵地との最前線となった。当時のマーシャル諸島は日本の委任統治領であり、太平洋海域における要地で、海陸防衛の中核であった。ウォッセには大叔父の所属する海軍第六十四警備隊をはじめ、航空部隊など約三千五百名の海陸軍将兵が配備された。戦いに臨み、士気も高かったことだろう。島内に数多く残る戦跡遺構から、将兵の活気ある

声、号令、ラッパが聞こえてくるようだった。

昭和十九年からマーシャル全域へ、米軍の空襲、艦砲射撃が激しさを増す。第六根拠地隊司令部のあったクエゼリンは、一月末に米軍に上陸され、日本軍は頑強に抵抗したが二月六日玉砕する。ウォッセ、マロエラップ、ミリなど上陸を免れた島は、連日爆撃を受け、補給路も脱出路もないまま敵中に孤立した。

ウォッセでは事前に、島民四百五十名全員を環礁内の別の島に避難させており、島民の八倍の三千五百名の将兵が籠城を余儀なくされる。まさに食糧が尽きた。珊瑚礁の島は海抜二メートルの平坦な砂地で、耕作して自活しようにも農地に適さない土地だった。海軍は内地から十トンの土を運び畑を作ったが、その畑ごと爆撃で吹き飛ばされた。戦闘より恐ろしい飢餓地獄となり、多数の餓死者を出した。複数の資料に、ウォッセの飢餓はミリやガダルカナル以上の凄惨、苛烈な状態だったと記載があった。

マーシャルの戦没者には三種類ある。米軍に上陸された島は「玉砕」、上陸されなかった島は「餓死」と食料窃盗に対する「処刑」

だ。

兵士は、前途に待ち受ける「戦死」を覚悟で故郷から出征したが、南海の孤島で、まさか飢餓に苦しむとは夢にも思わなかっただろう。今は緑豊かな島だが、ヤシの木が焼き尽くされ、全島が焦土となった七十五年前の風景を想像した。

## 二十五歳で戦死した大叔父

私が大叔父の足跡を調べはじめたのは十余年前。二十五年で人生を終えた彼の青春時代はどんなだったろう？ そんな素朴な疑問からだった。手探りだったが海軍の歴史を勉強し、ウォッセ配備の前に彼が乗った「愛宕」や「武蔵」の戦友会で生存者を探し、水交会で海軍関係者に会った。同時に南洋群島も学び、研究者や大学教授、貿易関係の方から情報を得た。その間にマーシャル方面遺族会に入り、日本青年遺骨収集団と出会い、硫黄島と沖縄の遺骨収容を経験した。平成二十八年「戦没者の遺骨収集の推進に関する法律（令和六年までの時限立法）」ができたこと知り、私はウォッセ島を遺骨収集の対象にしようとしたため、動き始めた。この機を逃せば二度とない。

これは最後のチャンスだ。

長年、集めていた日米の戦史資料や生存者の手記、昔の遺族会会報から「戦没者埋葬場所」の記述をコツコツ拾い、それらの情報をまとめ、所管官庁の窓口や政府関係者に送り、熱願と説明を続けた。最大の恩人・在マーシャル日本国大使館の岩田哲弥領事はじめ、様々な僥倖もあり、遺骨収容派遣に結び付いた。今までの積み重ねが活かされたことが嬉しかった。

しかし、難題があった。マーシャル諸島共和国には国有地はなく、すべてが私有地。土地制度が特殊で、ウォッセ島は三十五の区画にわけられ、それぞれの区画に四名ずつ地権者がいる。遺骨収容には何十人も地権者の了承が必要なのだ。この大きな問題は、岩田領事の綿密な事前根回しのおかげで、全地権者の賛同を得ることができ、胸をなでおろした。

## 三班に分かれての収容作業

ウォッセ島は、首都マジユロから約三百キロ。全長約三キロ、最大幅七百メートルの勾玉のような形で、ホテルも病院もない。私たちは簡易



# 飢餓の島

宿泊所と民家、四カ所に分かれて宿泊した。現在、島民は約八百名で、三十名を超える島民がワーカーとして手伝ってくれた。一週間、私たちは三班に分かれて作業した。

昨年十一月の事前調査で、遺骨の場所を把握していたので、初日から続々と全身骨を発見した。昭和十九年二月、激しい空襲を受け、第八〇二航空隊本部・電信室は窓からの直撃で約三十名が犠牲になった。このときの戦没者埋葬地が、私の担当したエリアである。八〇二空の鴨大佐、電信員、主計兵、気象隊の兵士も埋葬されているはずだ。

海軍のベルトのバックルやシャツのボタン、小銭も見つけた。下顎骨に残る、きれいな歯から若者が多いことも判明。骨は全身の方もいるが、身体の一部しか無い方もいる。直撃された電信室はとても凄惨な状況だったと想像する。

私たちの任務は、一人でも多くの遺骨を見つけ、できるだけ原形のまま、全身分を掘り出し、番号をふり、記録をとり、お一人ずつまとめて袋に保存し、遺骨鑑定士に渡すこと。それを素早く丁寧に、繰り返すのだ。遺骨の周辺に身元がわかるもの（記名の万年筆や印鑑など）がない

かも確認する。最終的に柱数（遺骨は一体ではなく一柱と数える）は、鑑定士がとりまとめる。

当初、ワーカー達は「宝探し」感覚で、遺骨を発見すると大騒ぎで喜んでた。彼らにとっては、初めて会う日本人との遺骨収容自体が珍しいことだ。私たちが遺骨に合掌し、小さな骨片まで大切に収容する姿を見て、彼らの態度が変わっていった。静かに、見よう見まねで丁寧に扱ってくれるようになった。

島では、ヤシの実が落ちて頭に当たり、即死したり半身不随になった人がいる。どのヤシの実が落ちそうかは、島民にしかわからない。ちょうど全身骨を収容中の私の頭上のヤシの実が、落ちそうだから離れると島民に言われたが、せっかくならば来て限られた時間だ、そうなるまでも「運命」と腹をくくって作業をした。すると英霊に守っていただいたのだろうか、無事にその場に眠る方の収容ができた。

遺骨の埋葬は、三人横並びだった。縦並びだったりと、規則性はないうらかったが、全身骨が多かった。一方、頭蓋骨だけの横向きの英霊は、苦悶の表情に見えた。苦痛の



重機を使って地中の遺骨を捜す

中で亡くなったのかと思うと辛かった。どうか痛みから解放されていますように。明日全身を探しますからね。一緒に日本に帰りましょう。私は毎日、遺骨と会話をしていた。

島は高温多湿、たびたびスコールがやって来る。三十分以上止まないとときもある。作業が中断され掛らない。おまけに土中がドロドロになり、全身泥まみれになる。

スコールが上がるまでの時間を利用して島の長老、チレさん（七十七歳）に昔の話を聞いた。彼の父親は戦前、首都マジュロにおいて、「日本

は休日。ワーカー以外の島民は砂浜で、音楽をかけてパレーポールに興じていた。こちらは作業中、熱中症で倒れる隊員も出た。マーシャルの紫外線は日本の十三倍。灼熱の中、のぼせるようにフラフラする。よくパレーポールができるなあと感じる。

夜になっても私たちは、分担で「やること」がある。記録や報告や翌日の準備などだ。この島はめったに来られない場所だからこそ、効率よく遺骨収容の成果をあげたい、という勤勉な日本人ならではの。しかし



厚労省の職員が帰国した英霊を成田で出迎える

し、生活面では水が止まったり、予想外のことが起きたりの慣れない環境下、疲れも蓄積していた。私は全身筋肉痛と右手首の腱鞘炎と腰痛が悪化していた。眠りの浅い夜は、大腿骨を見つけた夢を見た。

期間中に別の班では、重機を入れて、証言のあった電力会社のケーブル敷設エリアを捜索。しかし証言が二十年以上前のもので、残念ながら遺骨を発見できなかった。彼らはエリアを変え、島の南部で二十柱以上を収容していた。

私のエリアでは埋葬された三十名中、二十二柱を収容できたが、残り八柱は見つけられず、置き去りにしてしまふことが大変悔やまれる。二十二柱は籠城以前の、空襲被害の戦没者である。飢餓前の体力があった頃なので仲間達にきちんと埋葬された（ある意味、恵まれた）戦没者だ。その後は飢餓となり、穴を掘る体力もなくなり餓死者の遺体は野ざらしになった者も多い。島民は、骨を発見した際、「今まで難に扱っていた、ごめんなさい」と言った。彼ら

にとつて地表の骨は珍しくなかったのだろう。四十六年間も日本政府が迎えに行かなかった責任でもある。収容数は、合計四十八柱。身元が確認できるものは見つからなかった。第六十四警備隊の埋葬地はわからず、大叔父の眠る場所は不明のままだ。

### 焼骨の炎

最終日、美しい内海に向け、焼骨のやぐらを並べた。ヤシの実の燃料に点火、ポツと炎が上がる。骨が焼ける音、青い海に向かい薄く立ち昇る煙。英霊は筆舌に尽くしがたい労苦を味わって亡くなった。その死を悼み、彼らの無念を想像した瞬間、「悲しみの塊」が私の体に落ちてきた。そんな感覚を覚えた。国の命令で故郷からこんなにも遠く、暑く、環境の厳しい地に来て、餓死し、誰にも迎えにこない……俺たちを帰せ。骨が焼ける間、涙が止まらなかつた。

骨上げのときは、強烈な紫外線を目をあげていられなかった。炎天下、骨を白布に入れて運ぶ。砂地なので足重く、全員ふらふらして倒れそうだったが、最後の力を振り絞っ

統治時代はコブラ（ヤシの実の胚乳を乾燥させたもの。油脂原料）を高く買ってくれて、とても良かった。アメリカが来てからは良くない。値段を下げられ苦労した」と話していたという。

また、日本から持参した車椅子を贈るため、訪ねた老女は、日本の童謡「靴がなる」を歌って、私たちが家に迎え入れてくれた。日本語の発音は完璧だった。私は嬉しくて彼女と一緒に歌った。彼らが交わすマーシャル語は、難しいのだが、日本語由来の単語があり、チャンボ（散歩）、チャチミ（刺身）、チャンマ（秋刀魚）、ヤキユウ（野球）など、とても親近感を感じた。

ある日作業中、五十センチを超える大きなトカゲがヤシの木の上方にいて、島民は「トカゲ！ トカゲ」と喜び、煙で燻して落とし、袋に捕獲していた。彼らが食べるのか、売るのは不明だが、昔、海軍が食料としてトカゲを連れて来たらしい。私たちはワーカーと、身振り手振りでも仲良くなっていた。

### 「ピキニデー」

三月一日は「ピキニデー」で島民

た。英霊は、もともと辛く辛い状況だったのだ。彼らの我慢、辛抱、犠牲が、日本の柱となり戦後の繁栄の礎となった。彼らが望んだ未来は豊かな「現在」だ。

恩恵をもらうだけの私たちが、日本人として本来、果たすべき役割は何だろうか。一人一人が、わが事として考えなければいけない。絆を絶つてはいけない。私は多くの遺骨に触れ、七十五年の時を越えて英霊を近くに感じる。英霊は遠い地で、迎えを待ち続けている。

\*

三月七日雨の中、千鳥ヶ淵墓苑にて引き渡し式。自衛隊音楽隊が演奏する中、遺骨を抱いて入場し、厚労省職員に手渡した。マーシャル方面の遺族が大勢来られ、父を想い涙する方もいた。

ここに至るまで、多くの出会い、長かった道のりが脳裏を駆けめぐり、感無量だった。今回は四十八柱しかお迎えできなかったが、引き続きウォッセの遺骨収容が長く続くことを祈念する。

最後に、今回のメンバーで遺骨鑑定定の榎崎修一郎先生が、マーシャルから帰国して二週間後に急逝された。謹んでご冥福をお祈りする。